「持続可能な多世代共創社会のデザイン」
研究開発領域

領域が目指す社会とプロジェクト構成

1

平成30年3月2日　公開シンポジウム

「多世代による地域資源のつなぎなおしと文化多様性
　　－SDGsの実現に向けて―」

持続可能な多世代共創社会とは？

定義：
　今を生きる私たち（子どもから高齢者まで）が、将来の制約と豊かさを考えながら、過去から学び、現在の知識やテクノロジーなどを加えることで新しい価値を生み出し、次の世代がより良い生き方・豊かさを実現できるための資源をつなぐことができる社会。

アプローチ：
① 将来の制約と豊かさを想定しながら、過去から学び、現在の知識やテクノロジーなどを加えることで、新しい価値を生み出すこと。
　過去・現在・将来世代の共創。持続可能な社会の要件。
② 今を生きる子どもから高齢者が共に新しい価値を生み出すこと。
　①の共創を促すのに有効である可能性がある。
③ 過去から受け継いだ有形無形の資源を引き継ぐために必要な各世代の役割分担を明らかにすること。

領域目標とリサーチ・クエスチョン

【領域目標】（簡略版）

① 持続可能な都市
・地域のデザイン提示

② 多世代共創を促す仕組みづくり

③ 統合的な成果の社会実装
に向けたネットワーク構築

Q1. 持続可能な社会の実現にとって、どのような多世代的なアプローチが有効か？

Q5. 多世代共創的活動は人々の意識にどのような変化をもたらすか？

Q8. 地域らしさを規定する要因として、自然要因の重要性はどう変化していくか？

Q4. 自然科学系の新技術は多世代共創のあり方にどのような影響があり、それが持続可能な社会の実現にとってどのような含意を持つのか？

Q2. 若い世代にとって、多世代共創的活動に参加するための動機にはどのようなものが考えられるか？

Q3. 仮に多世代共創的活動の中で、参加の制度化などに向けて、どのようなことが考えられるか？

Q6. 社会実装を軌道に乗せるために、どのような戦略や配慮が有効か？

Q7. 多世代共創の程度や多世代型ソーシャル・キャピタル（SC）に関する指標にはどのようなものが考えられるか？

時代の潮流（概観）

	過去			現在		将来	
	～ 戦前・戦後	～	1970前半	～	2010年代	～	2030年 ～
時代	集約型					分散型	世帯数がピーク（負荷が減らない）
	高度経済成長	物質的な豊かさばかり追求			超高齢化		
	人の移動	利便性の追求		低い幸福度		心の豊かさ（生活価値）がベース	
	アニミズム型社会の終わり					ちょっとした不便さを楽しむ	
社会	地域的共同体	地域的共同体の弱体化			様々な同質的コミュニティ	多様性のあるコミュニティ	異質なものがつながるコミュニティ
	個が所属	大都市への集中	核家族化	企業内コミュニティ	地域的共同体から個が離脱	複数のコミュニティに所属	二拠点生活
経済	成長＝お金×時間という考え方					お金＋αのwell-being	
	お金中心の分配・拡散			地域経済の縮小化		グローバルに稼いで地域で回す	
環境	自然の循環の中	人と自然の分断		地球環境（地球規模の資源・エネルギー・水・食糧 等の問題）			
	地表から得られる資源	地下から得られる資源		生物多様性・生態系のバランス			
				気候変動			
文化	障害者・女性等、弱者の権利 弱			弱者の権利 拡大		高齢化で弱者 増加	インクルーシブ
	役割の分配	村八分		格差の拡大（文化・知識 等）		役割の分配	知の共有
	限られた知識・情報			価格からバリューへ			
	使い手によって異なるテクノロジー			人が使われるテクノロジー		人が使えるテクノロジー	

領域・各PJに求められるストーリーとは？

目指す「持続可能な多世代共創社会」への移行に向けて、

「どのような課題認識（視座）」を

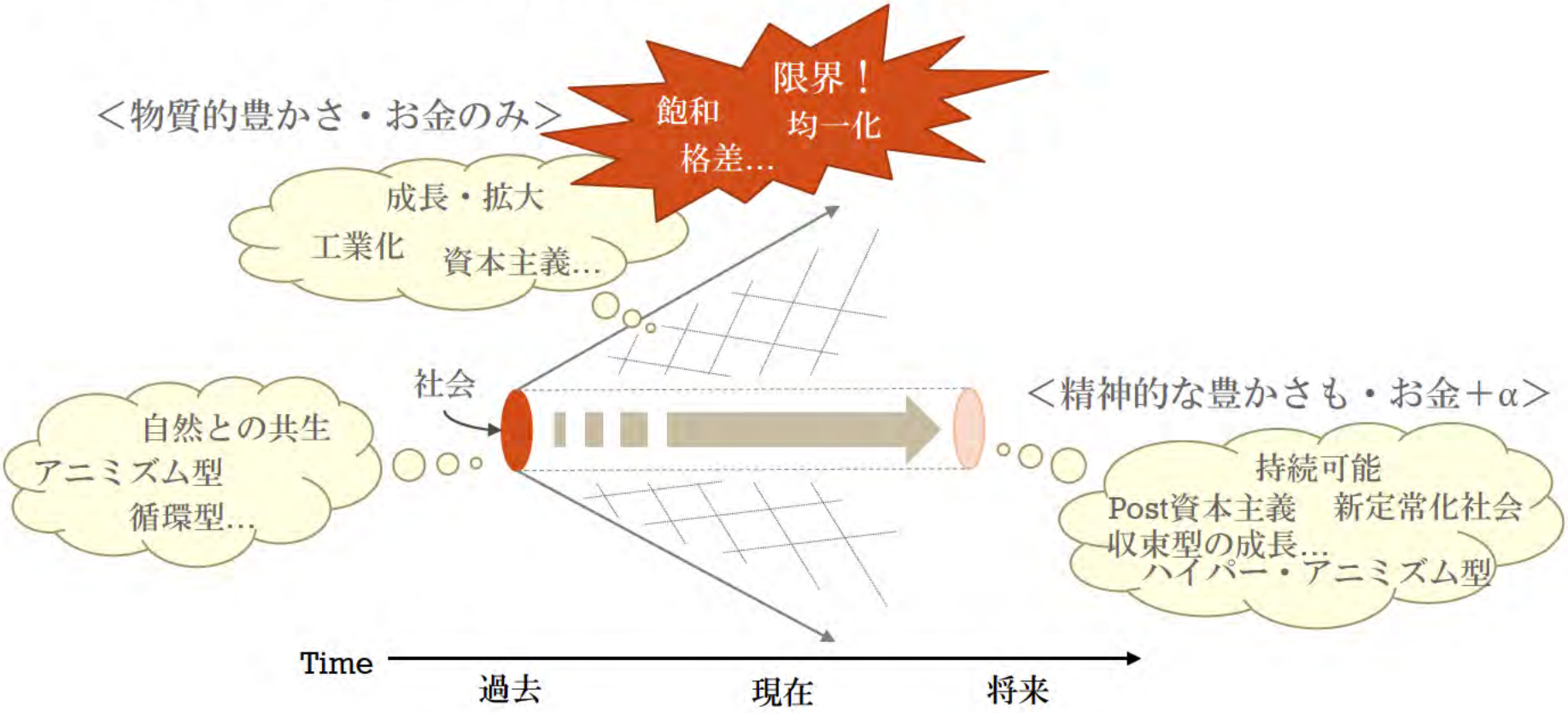
「どのような方法（多世代共創）」で越えることで

「どのような社会・人の変化（アウトカム）」を生み出し、

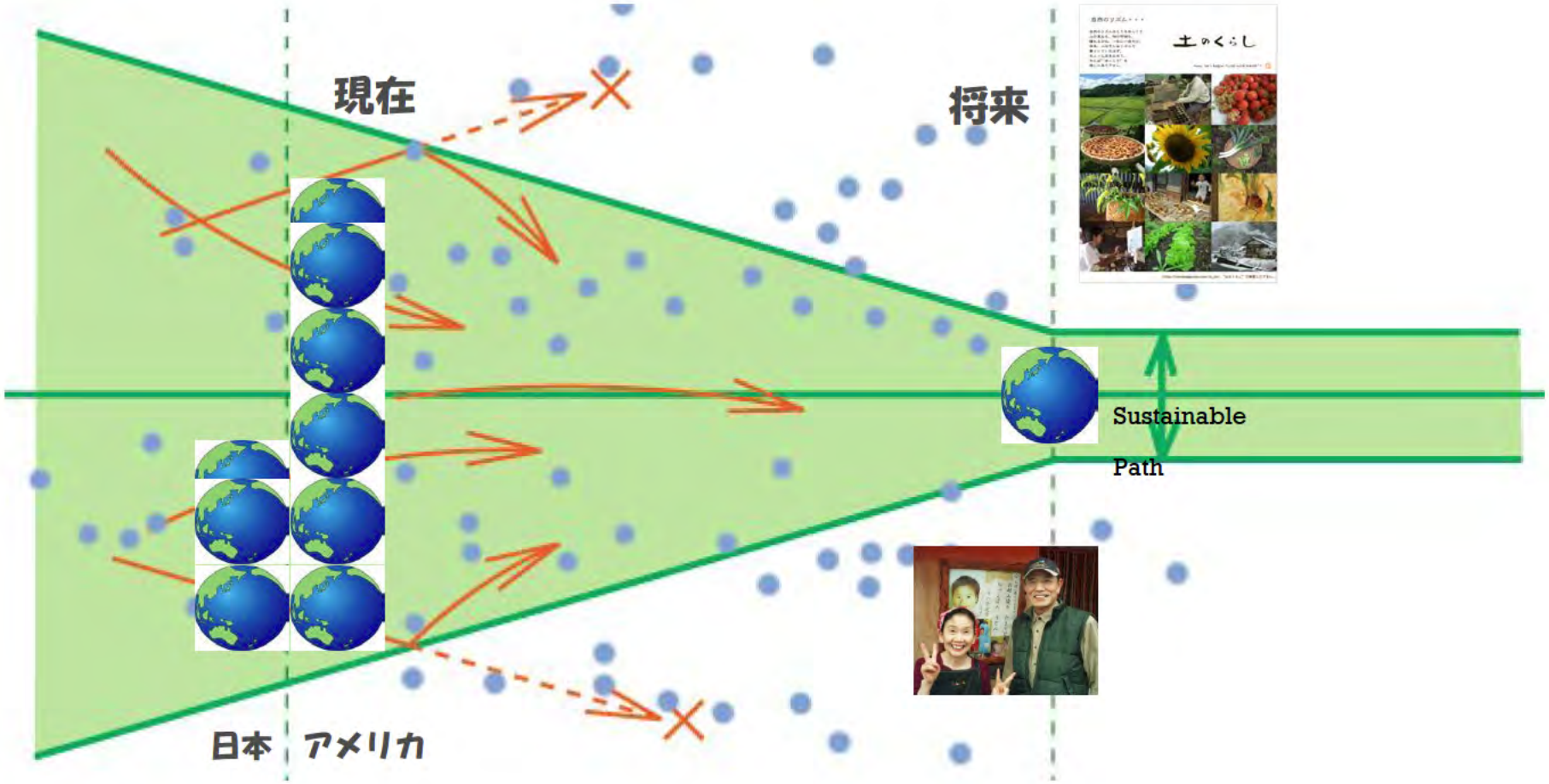
つなげようとしているのか？

「社会実装のための障壁」どうやって超えようとしているのか？

時代の潮流（概観）と問題意識



- 成長・拡大を求めて拡散したベクトルを、持続可能な一方向へ
  - 確かな未来は懐かしい過去にある　→　多世代共創
    - 「懐かしい未来（Ancient Futures）」ヘレナ・ノーバーグ・ホッジ著
  - 漸移的（段階的？途切れなく？）に多世代共創を進めるには、今を生きる子どもから高齢者の共創が必要



Copyright at Emile H. Ishida, Earth Village Research Lab. LLC

昆虫はなぜ過労死しないのか？

自然は倫理観を持つ知能

38億年の間持続発展する社会を創ってきた自然
我々はここから何を学ぶことが出来るか？

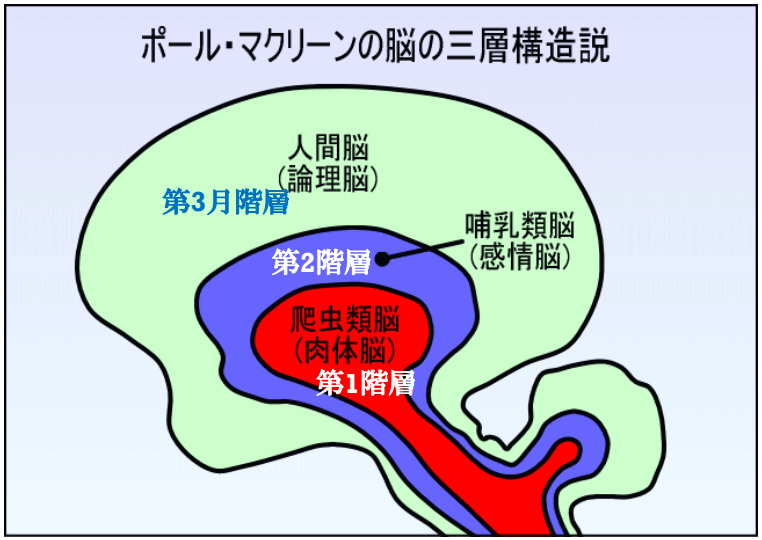
完璧な循環を最も小さなエネルギーで駆動
メカニズム、システム、社会性
NTの基本
⇒ なぜか？

Emile H. Ishida/Tohoku Univ.

Copyright at Emile H. Ishida, Earth Village Research Lab. LLC

脳の3層構造仮説

ポール・マクリーン(Paul Maclean)の脳の3層構造仮説　本能ー情動ー知性の相補的な機能



第1階層　爬虫類脳(reptilian brain)
脳幹と大脳基底核
心拍、呼吸、血圧、体温などを調整する基本的な**生命維持の機能**を担い、爬虫類に特徴的な自分のテリトリー(縄張り)の**防衛意識**

第2階層　旧哺乳類脳(paleomammalian brain)
大脳辺縁系(limbic system)
本能的情動や感情、行動につながる動機　種の保存　社会的活動や集団行動母性的な欲動

第3階層　新哺乳類(人間)脳(neomam-malian brain)
大脳新皮質の両半球(右脳・左脳)
言語機能と記憶・学習能力、創造的思考能力、空間把握機能

進歩主義の誤審
脳の構造の複雑化≠種の優越性の証
脳の構造に価値判断としての優劣はなく、ただ、構造と機能の差異に基づく**環境適応能力**の高低があるだけ

http://www.seibutsushi.net/blog/2008/02/391.html

http://charm.at.webry.info/200506/article_5.html

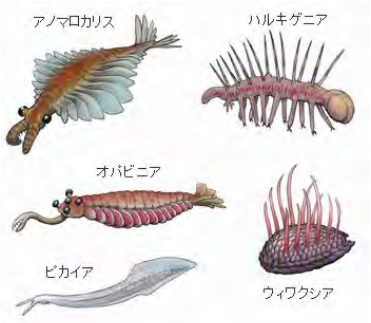
Copyright at Emile H. Ishida, Earth Village Research Lab. LLC

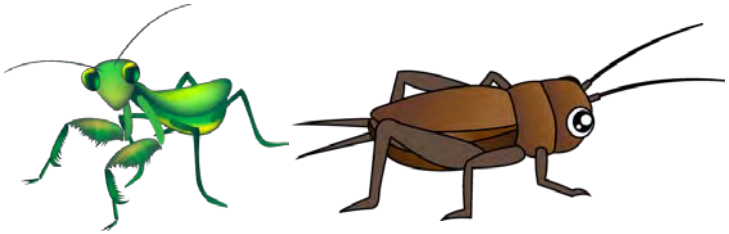
自然は完璧な循環をもっとも小さなエネルギーで駆動する、何故か？
（唯一の持続可能な社会を創生）

昆虫の脳細胞　10万－100万個　（人間1000億個）

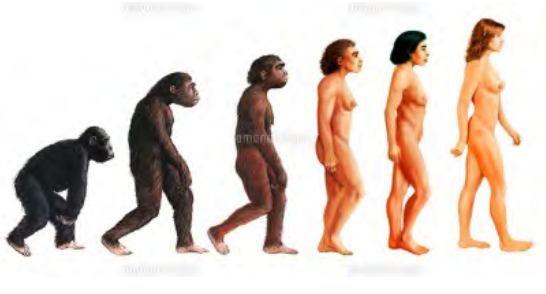
生物はメモリーを多く持てない＝環境の状況そのものがメモリー
生物にとって重要なこと＝身体を持つ・動くことで環境情報をメモリーとして得る

自然と一体＝生物の基本　⇒　自然をメモリーにして進化出来た（高い**環境適応能力**）





第1，2階層を駆使



http://www.geocities.jp/msakurakoji/900Note/image1/10521.png
http://ny.assort-hair.com/wp-content/uploads/2015/06/cricket_a01-1.png
http://www.sozai-bank.com/illust/musi/kamakiri1.png
http://cdn.amanaimages.com/cen3tzG4fTr7Gtw1PoeRer/01809011158.jpg

Copyright at Emile H. Ishida, Earth Village Research Lab. LLC

人間はなぜ持続的な社会を創れないのか？

圧倒的なメモリーを有する第3階層で仮想的な世界を創造し、山を崩し、海を埋め、地下から資源やエネルギーを掘り出した。

脳は色々なものをセンシングするが、意識に上るものしか自覚しない。
意識に上る＝第3階層　　意識しない＝1，2階層　（第6感もこれ）

第1，2階層と第3階層の連続性を求めている
＝自然と関わる、自ら動く

「間」を埋める　＝少しづつ自足の暮らしに向かう

Copyright at Emile H. Ishida, Earth Village Research Lab. LLC

領域の問題意識・仮説

- 過去から引き継いだ資源（ストック）を、適切なガバナンスによって将来に渡す・つなぐ、という考えや政策が希薄。
  ← *過去・現在・将来の多世代共創を促す仕組みや方法論がなく、*
  「今」を託された世代意識が希薄化

- 経済成長に有効と考えられた社会システムによって、地域的共同体から個が離脱し、世代も含めて同質的なものばかりでつながっている。
  ← *今を生きる多世代がつながる仕組みも弱い*
  異質なものがつながり、新しい価値を生み出す機会や場が少ない

- いまだに「経済成長＝豊か」という考えが根強く、環境、経済、社会、文化の側面から包括的に考えることができていない。
  新しい豊かさや良き生き方、それらへ移行する道筋が見出せない。
  ← 新しい豊かさ（＋α）が見いだせない
  ものさし・指標・事例がない

領域の問題意識とPJ（1）

		新しい豊かさ（＋α）	新しい豊かさのものさしづくり	多世代共創を促す仕組みづくり
1	倉阪PJ	未来の行政のあり方	未来カルテ（ストック推計）	未来ワークショップと総合計画、教育
2	関　PJ	インクルーシブ社会への対応（視覚障害者）、多様性のある社会		アクセシビリティ情報の共有システム、マッピングパーティ
3	渡辺PJ	未病社会、”斜交”関係	多世代関係尺度	ふるさと絵屏風、多世代の居場所
4	内田PJ		個と集団の幸福のものさし	
5	金藤PJ	自然（ワカメ･羊）と人のつながり再考		羊牧場/ウール工房/人
6	島谷PJ	自然（雨水）と人の共生		雨水センター、分散型水管理システム、雨庭コミュニティ創出、新たな祭り、環境教育、絵物語
7	藤原PJ	互助・共助システムの創成、都市部の地域包括ケア		挨拶運動、多世代交流の居場所、暮らしプロモーター、WEBマッチングシステム
8	古川PJ	豊かな地域、ライフスタイル産業創生	豊かさの評価指標	90歳ヒアリングとバックキャスティング、落語、木育ワークショップ
9	大塚PJ	自然（地魚）と人のつながり産業	地魚を主役にした持続可能性指標	ストーリー型環境学習イベント、地魚レシピ開発、サイバーマルシェ
10	大沼PJ	資源融合による地域産業の革新		コアトリエ、近代産業と生活景
11	後藤PJ	まちなか未病の創生		オーラルヒストリー、医大生によるまちなか医療、重伝建と生活景
12	堤　PJ	公共施設の縮減シナリオ	地域公共施設の評価	自治体・住民情報共有システム、ワークショップ
13	家中PJ	森林を土台とした地域包括ケア		サポートデザイナー・センター、地方移住する若者と高齢者への役割供与
14	岸本PJ	お金の新しい価値		寄付・遺贈、クラウドファンディング
15	河野PJ	αの要素抽出		哲学対話
16	要藤PJ		ものさしの要素抽出	

領域の問題意識とPJ（2）

高度経済成長期	現在		PJが対象とする 制約／社会課題（要素）	PJによる 新たな価値創造（ｱｳﾄｶﾑ）	PJが取り組む 多世代共創を促すしくみ（手段）
大都市化・一極集中 家族形態の変化・ 核家族化 物質的な豊かさ・ 利便性の追求	社会	超高齢化 地域的共同体の弱体 精神的豊かさの追求	社会保障制度の限界 支える人材の不足 ﾗｲﾌｽﾀｲﾙの見直し 多様性のあるｺﾐｭﾆﾃｨ 個の離脱	未病社会の創生 互助ｼｽﾃﾑの創生 ﾗｲﾌｽﾀｲﾙ産業の創生 人もまちも元気 未来に託す志金 ｿｰｼｬﾙｷｬﾋﾟﾀﾙの世代間継承	幸福のものさし、”斜交”関係 多世代の居場所 暮らしﾌﾟﾛﾓｰﾀｰの養成 90歳ﾋｱﾘﾝｸﾞ・ﾊﾞｯｸｷｬｽﾄ ｵｰﾗﾙﾋｽﾄﾘｰ まちなか医療 寄付・遺贈
技術開発・ものづくり 工業化 物理的ｲﾝﾌﾗ整備 ｱﾆﾐｽﾞﾑ型社会の 終わり	経済・文化	社会的包摂への取組 脱工業化・ｿﾌﾄ化 地域経済の縮小化 伝統文化の保存 働き方の見直し	社会的弱者の権利拡大 格差の拡大 公共資産の行き詰まり 地域固有風土の喪失	弱者（視覚障がい者）の受容 公共施設の縮減ｼﾅﾘｵ 地域産業の革新 森林を土台とした地域包括ｹｱ	情報共有ｼｽﾃﾑ 未来ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ ものづくりの場 若者と高齢者の役割供与
人と自然の分断 地下資源の活用	環境	気候変動 自然災害 地球環境資源の制約 生物多様性への制約	都市の水問題・水害 循環型産業 食と自然の分断	人と自然（雨水）との共生 人と自然（ﾜｶﾒ・羊）のつながり再考 人と自然（地魚）とのつながり産業	分散型雨水管理 ”雨庭”ｺﾐｭﾆﾃｨ創出 地魚が主役の持続可能性指標

領域の問題意識とPJ（2）不足している部分

高度経済成長期	現在		PJが対象とする 制約／社会課題（要素）	PJによる 新たな価値創造（ｱｳﾄｶﾑ）	PJが取り組む 多世代共創を促すしくみ（手段）
大都市化・一極集中 家族形態の変化・ 核家族化 物質的な豊かさ・ 利便性の追求	社 会	超高齢化 地域的共同体の弱体 精神的豊かさの追求	社会保障制度の限界 支える人材の不足 ﾗｲﾌｽﾀｲﾙの見直し	未病社会の創生 互助ｼｽﾃﾑの創生 ﾗｲﾌｽﾀｲﾙ産業の創生	幸福のものさし、”斜交”関係 多世代の居場所 暮らしﾌﾟﾛﾓｰﾀｰの養成 90歳ﾋｱﾘﾝｸﾞ・ﾊﾞｯｸｷｬｽﾄ ｵｰﾗﾙﾋｽﾄﾘｰ まちなか医療 寄付・遺贈
技術開発・ものづくり 工業化 物理的ｲﾝﾌﾗ整備 ｱﾆﾐｽﾞﾑ型社会の 終わり	経 済 ・ 文 化	社会的包摂への取組 脱工業化・ｿﾌﾄ化 地域経済の縮小化 格差の拡大 伝統文化の保存 働き方の見直し	社会的弱者の権利拡大	弱者（視覚障がい者）の受容 森林を土台とした地域包括ｹｱ	情報共有ｼｽﾃﾑ 未来ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ ものづくりの場 若者と高齢者の役割供与
人と自然の分断 地下資源の活用	環 境	気候変動 自然災害 地球環境資源の制約 生物多様性への制約	都市の水問題・水害 循環型産業 食と自然の分断	自然（雨水）と人の共生 自然（ﾜｶﾒ・羊）と人のつながり再考 自然（地魚）と人のつながり産業	分散型雨水管理 ”雨庭”ｺﾐｭﾆﾃｨ創出 地魚が主役の持続可能性指標

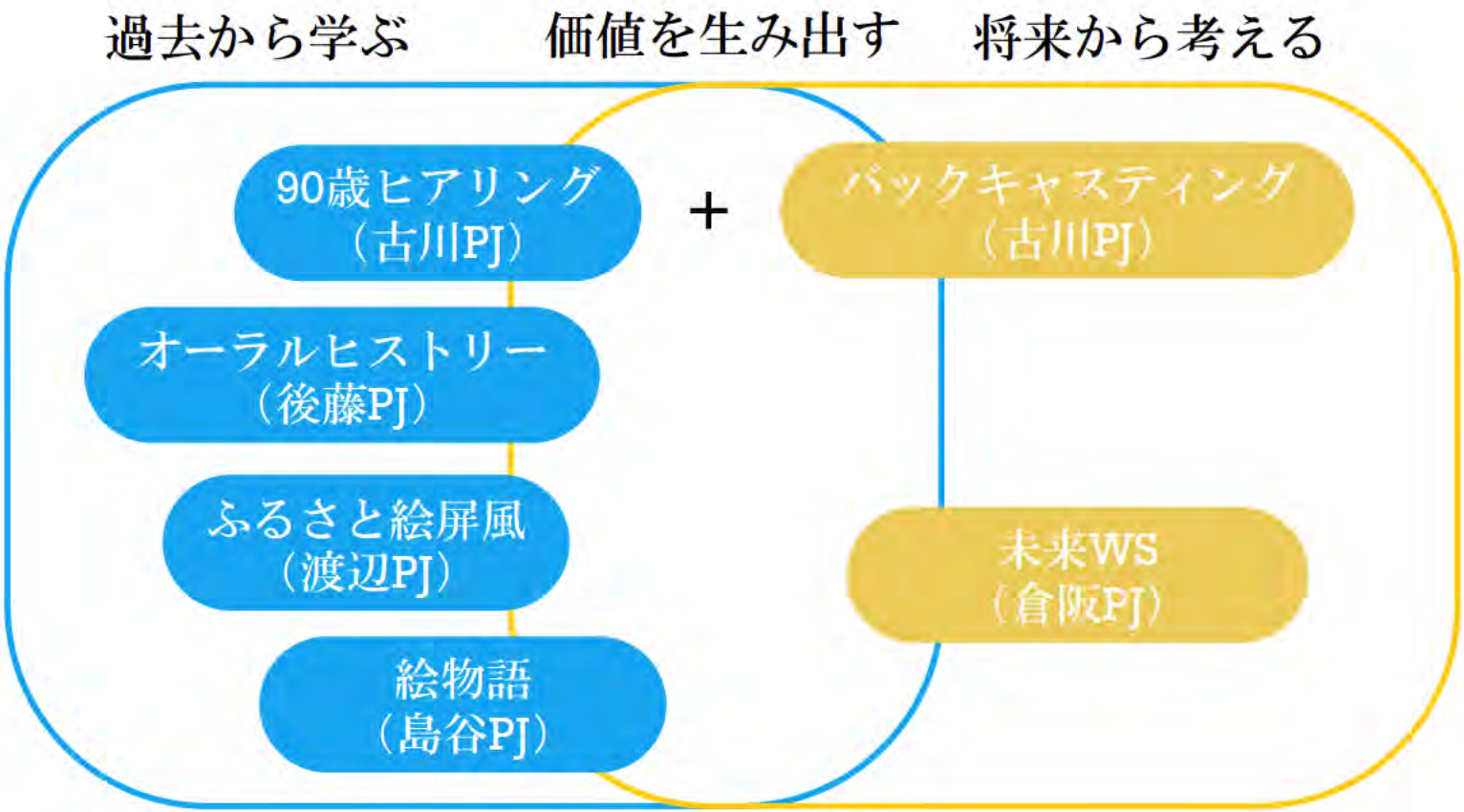
ライフスタイルと社会システム
×
ビジネス

インクルーシブ

格差の是正

生物多様性の劣化と人の関わり

過去・現在・将来の多世代共創を促す仕組みや方法論の開発



今を生きる多世代がつながり、新しい価値を生み出す仕組みの開発

つながる場

- 多世代の居場所（渡辺・藤原PJ）
- 雨庭センター・コミュニティ（島谷PJ）
- コアトリエ（大沼PJ）

つなぐ人

- 居場所運営NPO、社会的企業（渡辺・藤原PJ）
- 住民：くらしプロモーター（藤原PJ）
- 住民：あまみずコーディネーター（島谷PJ）

つなぐシステム

- 多世代型地域包括ケア 都市部（藤原PJ）・地方（家中PJ）
- アクセスビリティ情報共有システム（関PJ）

Nature Technology

Creating a Fresh Approach to Technology and Lifestyle

「持続可能な多世代共創社会」

是非、創りたい！

すてきな子や孫のために・・・

Emile H. Ishida, Earth Village Research Lab

Copyright at Emile H. Ishida, Earth Village Research Lab. LLC

領域の成果の社会への影響

- 領域に依存せずに「持続可能な多世代共創社会」を実現していくには？領域の考え方や成果を、誰に、どのように、渡していくとよいのか？

- クロスステークホルダー
  - 住民と行政の接点となるアクターや組織（例えば以下）
    - 市民円卓会議
    - DMO（Destination Management Organization、地域にある観光資源に精通し、地域と共同して観光地域作りを行う法人）

WGの課題と状況

- 本領域における言葉の定義　←済み
  - 持続可能な社会
  - 多世代共創
  - 持続可能な多世代共創社会

- 「持続可能な多世代共創社会」の要素とイメージ　←もう少し

- PJの位置づけと、各PJに期待されるアウトカムとは？　←もう少し

- 領域に依存せずに「持続可能な多世代共創社会」を実現していくには？
  領域の考え方や成果を、誰に、どのように、渡していくとよいのか？
  ←もう少し

- ロジックモデルの改訂　←これから

領域の中間評価結果

評価項目	評価結果
対象とする問題及びその解決に至る筋道（ストーリー）	一層の具体化、明確化を図っていただきたい
領域の運営・活動状況（プロセス）	総じて優れた対応がなされている
目標達成に向けた進捗状況等（アウトカム）	領域の３つの目標に沿った成果創出に引き続き注力いただきたい

【領域目標】（簡略版）
① 持続可能な都市・地域のデザイン提示
② 多世代共創を促す仕組みづくり
③ 統合的な成果の社会実装に向けたネットワーク構築

ストーリーとは？

目指す「持続可能な社会」への移行に向けて、

「どのような課題認識（視座）」を

「どのような方法（多世代共創）」で越えることで

「どのような社会・人の変化（アウトカム）」を生み出し、

つなげようとしているのか？

「社会実装のための障壁」どうやって超えようとしているのか？

ストーリーとは？

目指す「持続可能な社会」への移行に向けて、

「どのような課題認識（視座）」を

「どのような方法（多世代共創）」で越えることで

「どのような社会・人の変化（アウトカム）」を生み出し、

つなげようとしているのか？

「社会実装のための障壁」どうやって超えようとしているのか？